研究発表　分科会 1　芸術と経験科学 10 月 14 日（土）14：00-14：40　南校舎 453

「生命」としての聴者
―― 音楽療法へのブラウニズムの影響をめぐって

電気通信大学　岡野 宏

本発表では 18 世紀末から 19 世紀初頭における音楽療法に対する「ブラウニズム」の影響を検討する。ブラウニズムとは、スコットランドの医師ジョン・ブラウン（1735-1788）によって提示された一元論的医学思想である。ブラウニズムは 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて西ヨーロッパや米国で流行し、とりわけドイツではロマン主義的な自然思想とも連動し、ノヴァーリスなどに影響を与えた。

ブラウニズムが同時代の音楽療法に対して影響を与えたことはすでに複数の先行研究（Möller 1971; Völkel 1979; Schumacher 1982; Kennaway 2012）で指摘されているが、それらはごく定式的な理解に留まっている。本発表は、複数の文献を比較検討することで、その治療の特性をより詳細に抽出することを試みるものである。

治療的な音楽の使用は西欧では古代からの伝統を持つものであるが、従来は「エートス」論のもとに魔術的な側面を有していた音楽療法が、より実証的な性格を強めるのは 18 世紀のことである（Kümmel 1977）。ただし Gouk（2000）が指摘するように、18 世紀においてもなお思弁的な音楽療法観は残存していた。この点について、本発表ではその実証性・思弁性を問うことはせず、記述内容に表出された治療思想それ自体を分析対象とする。

こうした問題設定を行うことで、以下の論点を抽出する。まず、18 世紀の音楽療法言説一般において見られる傾向として、第一に音楽による治療的効果の「即時性」が強調されているということ、第二に「逆症療法」的な治療観が存在するということである。さらに、同時代の生理学的知見を応用した指標「興奮性 excitability」の多寡によって患者の状態を判断するブラウニズムの影響下にある音楽療法言説においては、第一に治療的効果がむしろ「漸次的」なものとされていること、第二にいわば「量化された同質の原理」とも言うべき治療観が形成されていることである。発表者はこうした変化の中に、フーコーの言う不透明で厚みのある身体を伴う「人間」、ないしカンギレムの言う科学的計測の対象としての「生命」の出現を看取する。

その上で、発表者は本発表で検討した音楽療法において音楽を聴く被治療者を、一つの「生命」として捉える視点を提示する。そこでは、聴取自体が ―― それを通じて聴者としての被治療者自身が変化するという意味で、それは生命の活動である ――、正常と病理の間を推移し続ける。そのとき聴者は環境としての音楽の相関者となるが、この相関によって彼／彼女は絶えず変化する不安定な存在となる。こうした生命としての聴者は、制度的な芸術音楽におけるそれとは異なるようであるが、なお近代的なイデオロギーの所産として検討されるべきである。